冬の日

ガラス扉を開けてヴェランダへ

午後の陽射しは眩しいほどだけれど
風は冷たく、強く吹きつけている

洗濯物はカラカラに干からびて
触れるとパチパチと火花が飛びそうだ

身を乗り出して下を覗いても
寒さに凍えてか、誰も居ない

　そう言えば、昨日、友達が来た
　日常という遠い国からのように

　そう言えば、一昨日は雨だった
　部屋の中まで凍えるような寒さだった

艶のある若い枝が華開いている
まるで凍りついた線香花火のように

ああ、私はこの世界の美しさを知らない
私の心に映る、その影の色合いだけを知っているだけです

　そうだ、そう言えば先月は母が死んだ
　人は、まるで魔法のように消えることができるのだ、と知った

　そうだ―――、私はどうやって生きてきたのだろう
　どんな道を歩いてきたのだろう・・・

　決して困難な生ではなかったし、みすぼらしくもなかった
　生きているということを、忘れてしまっているときには・・・

　そう、それを忘れてしまっている間は
　私は、きっとちゃんと歩いているのだけれど

ああ、私はなぜ生きているのだろう
私をこの世に引き止める何かが、あるだろうか

死ぬこと、いいえ、死への扉を開くこと
その激痛、悶絶、敗残の恐怖―――、それだけか・・・

そう言えば、雲が出てきたらしい
日が少しかげりはじめてきたらしい

影の色が薄くなっている
洗濯物を取り込もう
そうして、忘れてしまおう

(2005.1.30)